白鷺洲

卷二

196
415

白鷺洲第貳

一淨明院事江戸え罷在候時何樣の事にて候哉松平丹後守樣御方え時々參居候に御當地にて寺の咄共申上候に從殿樣段々御寄進共有之候由申上將又御前樣にも何々御寄進被遊度段申上候へは彌御寄進可被遊由にて已後小屏風に古筆の短尺を押裏は狩野の繪の由にて有之候を御奇進にて候か其屏風の中に右榮雅卿五月雨の御歌有之其屏風にては有之間敷哉と被申候へ共寸尺も違候由申達候へは左樣に候はゝ如何樣別成のにて候半由被申候事

一內田等甫と爲申繪師はいか樣成人にて候哉と申候へは寬陽院樣御代の繪師の由被申候事

八月朔日

一當春より足の病有之候て引入居候處少々つゝ快方候故步行御暇申上

大正 9. 9. 29 購求

此比罷出候付靜隱殿宅え參候久々逢申候由被申候何かと咄共申時分庭え白蓮有之候此蓮此間は眞盛にて候とふも被申れ氣(ぬ脫カ)景にて候由咄にて候未一蕋(スイ)相殘り居候

一靜隱殿隱居所の先え木屋ことくの普請有之樣子に候故爲何普請にて候哉と相尋候へは經讀所を二枚敷に拵候由被申候是は珍敷御好みにて候由申候へは皆人野屋敷抔と申候て所持候へ共靜隱殿事は野屋敷も有之候へ共夫までは得不參候故野屋敷と存拵候由然處に面白く出來候と申候へは存候よりも結構に有之別て手間取候事と被申候て笑被申候事

但子息嘉右衞門殿被參候付珍敷御普請の由只今委細承候由申候へは成程此中賀右衞門殿え相談有之候は皆人野屋敷所持候へ共自分は野屋敷えも參候儀不調候故野屋敷と相極細き木屋を作候は

ゝ如何可有之と被申候由御尤に存候間御作被成候樣賀右衞門殿より被申候て企にて候由

一句双帋とて一句々々つゝ板行にいたし候横折の小本有之候を被出候て左の文句を見申候へと被申候

漁翁睡重春潭濶白鳥不飛舟自横

と有之を何と面白き景にては無之哉と被申候事此双紙は禪宗の問答を仕時此双紙の句を覺不罷在候ては不叶事にて候由

一此間上町人商賣としてして上方え罷登下候間此者俳人にて候故めつらしき發句なるは不承歟と相尋候へは差て珍敷發句も不承候へ共只今上方にて上手と申者の由右の發句を見申候是は別て上方句にて面白御座候由其句に

竹の子のに物をしらぬ住居哉

此句つく〳〵と相考候に西行の歌にと〳〵〳〵とおつる岩間の苔清水の句の歌格に似寄候由又外に右の宅を尋參候に其時いたし候發句の由

一聲は扉の花や五月鳥

是も面白く候へ共右の句よりはおとり候哉と存候先上方の儀竹の時分には竹の子にても根堀にいたし賣不申候ては八百屋一切買不申候由都て竹も根堀にても切申たる竹の子は買不申候故盗堀抔申儀無之よきしまりにて候左候へは右の句にも此心こもりかた〳〵面白き發句にて候由咄にて候

八月九日

一靜隱殿宅え參候處此間より調被申候艸庵出來いたし有之候故庭より直に右庵え參候處靜隱殿被參暫内え可參由被申候へ共先重て得と可參候由申候て隱居にて咄いたし候事

一橡え古釜二つ有之候右釜を見せ可申由にて手つから被出候て見申候一つは別て古き釜にて候此釜は和泉國え俊寛屋敷と申候て有之其村の百姓所持候由右釜感應寺より貰置候由にて右の咄にて候此釜は芦屋なとよりも以前のものにて候又一つは梅に竹の最樣有之是又古き釜にて候故相尋候へは是は通例の芦屋釜にて候少口いり雙のなりとか被申候右終て又々相尋候は俊寛屋敷と申候へはいか樣俊寛和泉國え居被申候時御座候て右通にも申傳候哉と申候へは左樣成事は不存候何とて和泉國え居可被申事は無之筈候喜界島え下り候時抔いか樣和泉抔え居被申たる人にても候哉其間は不存候先平家物語を見申候に都より□□丸俊寛え爲對面薩摩え下ると有之候其時俊寛は入來壽昌寺え被居候由左候へは皆々上洛の時俊寛にも日本の地えひそかに被渡たるかと相考申樣に御座候壽昌寺には右□□丸の墓も于今有之と古き人より承候由珍敷事にて候事

一此節の艸庵出來の儀に付何かと咄共申候時右の家に京都カウタイ寺と申寶地に太閤様より利休え被仰付候艸庵山中え有之候其莚月やう天井なく傘を見申候様に有之傘莚月と申候由板敷にて疊無之半疊を夫〳〵敷置申候由にて右艸庵は參見申候間傘莚月に致様は有之間敷哉と日雇の者え申聞候へは終に見不申事故相調間敷却て手間取にも可被成哉と申候故左様の事は御止只今の通りと咄にて候夫より申候は是は珍敷思召にて候先成就いたし候を見申候に夜の氣色嘸と存やられ候由申候へは月の西え傾き申程氣色は能候夫故澤庵の春雨庵の歌此内存出候私の何ぞ歌讀申候には不及申にて右の歌咄にて直に書付被送候

結ひ置て今はとおもふ艸の庵我より先に月ぞ澄ける

右の歌にても又咄御座候樺山主計殿御家來え佐々野何卒と候者有之

茶氣も有之もの候處主計殿御詰中大德寺え右の者參候へは其時の和尚よりいつそ春雨庵にて麁茶を可進と被申候へは是は別て忝奉存候間いつにても伺公可致由申候て重て茶の湯の時右春雨庵の掛物右の歌の澤庵御自筆にて感し入候由しか〳〵の趣は不存此御歌は何様の時の御歌にて候哉と御尋申候へは直に此春雨庵澤庵御作被成成就いたし被爲移候半と被成候時月能其時の歌と御咄にて候由承猶々感入候由右の者より委細承置候此節靜隱殿庵も先夜なとの月に右の通にて候由隨て名を山さとゝ見立申候由咄にて候事

一御書院え有之候德光禪師御掛物を寫候由申候へは扨〳〵能事をいたし候由被申候夫より直に德光の讃を吟し德光は大和識にて別て名を得候禪師にて候淸盛餘り惡業を被盡候故重盛父の惡業世以智所に候へは平家の子孫長久の儀難叶とて冏山え德光の方え爲菩提金銀を被

相渡候由其時金を被渡候賦有之候又德光より結構の思召立とて其返書を長崎にて大身の町人何某名失念右の者所持いたし居候申然處に段々驕りをきわめ竹御仕置に被仰付家財は拂物に相成候節細川樣え右の德光の返書御求め一所に忠度行暮ての歌の自書御求め被成候島津帶刀殿には右の趣能御存知故越中守樣御方役目の衆え被仰合直筆寶物にも候へは拜見も難致候故虫干なとへ右の御掛物抔出候節御寫御見せ被下儀は相叶間敷哉と被仰入安候事の由返答にて德光の返書は被見候由然共金の渡り候は不相知候と御咄承候由咄にて候

但平家物語の內にも德光禪師に重盛より爲菩提金を被渡候儀有之其以後にいたり淸盛の跡を吊と有之儀段々入道樣被聞召上琉人渡唐の節承入候樣に被仰付琉人承合候へ共程隔りたる事にて不相知候由申上其儀靜隱殿被考候に先琉人の儀平家物語なとの儀委細不存筈にて大形に承たる筈候へは不承合と申儀と又たしかならさる事と存候由

一大原貞以此間靜隱殿宅に被參候由然に有栖川宮樣より薩摩のふときの御所望の由被仰入當分其御吟味にて候へ共ふときは上代に相捨りたる者候へは諸國共に無之ものゝ由然共土佐國計は相殘り候由右に付當分相槽り無御座候被仰上候へは加賀國えふとき被仰越候へは是も相捨り只其國中の儀委細に書載候物を加賀より參候間其通にいたし御所望被成度と御座候て當分其しらへにて御座候由貞以も古き歌より此比にいたり諸々の名所などをひろい書綴候て御記錄所え差出候由にて國分なけきの杜なとの儀も蛭子の故事共に委敷書認存寄無之哉と申持參致見せ申候へは何と存寄も少も無之事にて右の趣見申候に博學の者にて候と咄にて候彌有栖川樣御所望の儀候哉承は不致候

歟と被相尋候に付左樣の儀は不承候然共此節の御目附樣京都兵部樣より御國中の名所由緒の地共委細に相認候ものを御覽被成度と被仰入當分は内々其しらへ御座候由承候歟いか樣其通成事にて候哉と咄申に左樣成承違共にては無之候哉と被申候事

右書付の内に國分氣色杜の儀相知不申いか樣此事は井上宮内なとゝ御尋被遊候はゝ神事にて候間委敷可相知と存候由當分は天神の杜とて氣色杜有之由菅亟相と諸人も存候由候へ共宮内より承候得は天神七代の時の事之由夫をあやまり候由

一井上宮内と申人は別て勝たる者にてあれ程に神道に委敷ものは無之由宮内明暮咄承候に段々修行もいたし候へ共親へは中々經を讀候儀おとり候由申候是は長々京都稽古を寛陽院樣より被仰付毎日吉田殿御方抔にてよみよくよみなれたる事故是かおとり候と咄被申候事

但右終て中臣の秡は必宮内存命の内に可承由咄被申候

一何某とか被申候へ共名を失念いたし候此人吉田殿え神道稽古にてゆふたすきと申まては稽古のゆるし被仰付候由其者の咄に承候に神道程六ケ敷ものは無之由此極意と申は息をふつと外へつきいたし候迄と承候由たとへは神前へ御酒を上け候に外に何事も不入候只此息つかひにて本意にて候由尤にては無之哉と被申候故致感心候先人間生て所事外には無之事候故右の咄にて候事

一此節御目附京極樣御尋にて候由承候は御當地も唐物屋有之候歟と御尋にて候成程御座候由申上候へは茶碗類御覽被成度由にて御覽被成候に井戸脇茶碗とう燒御茶碗二ッ御求被成候由承候先大茶碗御好にて候と相み得物笑被申候事

一此日上林門太郎殿薄茶別紙致持參候如例安座の手前にて寄合被下候

其時加入とうやを寫候赤き茶碗にて候故手馴れ能候由申候得共不斷に相用候と別て能相成候由咄にて候

八月十四日

一今日靜隱殿隱居え參候處從此間普請取附方二枚敷出來候に付於彼方咄可致由被申候付二枚敷え參候事

一掛物に隱元和尚墨蹟の南無阿彌陀佛と有之候隱元の御手を見申候に別て見事成由申候へは能書候由被申候隨て印石を見申候に上の印は隱元之印と有之下の印は何とよみ申候哉と相尋候へは隆奇と讀可申由被申候左候て此兩印を見申候に玉印の樣にも見得申候へは唐人のよき人は大形玉印を被用事候故餘りよき印は少く彫樣も印石程には不參候由

一隱元事は親父何とやら爲申官人の由鼓山合戰にいか樣討死にても被致候哉行方不相知人にて候由其時隱元は尋として諸國を三年程經迴り於處々被相尋候へ共討死共又は圍共一切行末不相知候由

一隱元和尚事最初は鼓山覺禪師え相付不斷座禪を勤修行有之候へ共しかく の事にて候黃蘗の何とやら申人の所え相附居被申悟道の人にて候由其後日本え招請逢渡被申候に右に付最早再御目にかゝり上候儀茂無之筈と存御暇乞に參候由にて永覺禪師の方え被參候處永覺より御挨拶に日本え招請の儀傳聞及候先夫よりも黃蘗の何某所にて悟道の由是こそ一段の儀と御挨拶有之候處隱元額より大汗せにて及赤面候由此事を出家の衆へ靜隱殿咄承被申候に大汗に成被申候儀自永覺禪師の對大德是を知被申候儀中々及所にて無之咄被申候事

一唐金鉢砂の物に盆石有之候是はいか樣故有之所の石にて候哉と相尋候へは夫に付おかしき事御座候若き時分より拇尾明惠上人はしんかういたし候に付拇尾え參候節ゆかの下にて拾ひ申候此明惠上人は大

徳の人にて春日大明神と夜々御相談申上たる上にて入唐渡天の志有之候へ共春日大明神より御免に無之無是非被相留候入唐渡天抔も何そ珍敷事も無之候間先唯今の通致居候樣に有之被相留候由其後紀州高濱と申所へ被爲越候節大汐をなめ此汐といへるは三千世界を行めくる物にて自身も同しとて涙を流し折節其所え石有之候を拾ひ被成候て被爲歸候節上の句失念の由下の句飛んて歸ね高濱の石と申歌有之候由此石の儀に付ても釋迦の故事有之を咄にて候得共大形失念いたし候其大概は釋迦川を渡らせ給ふ所に足を踏込み給ふ跡有之を釋迦の弟子何とか名を附爲申樣にも覺候其趣を以卒婆石と名附申候も中〳〵ほかの事にて候へは一入の御ゑんに逢申候と于今秘藏いたし候由左樣成咄を眞言坊主の衆へいたし候へは則日此石をほしがり申候由

一風呂有之候琉球にて燒候由水指は赤樂燒（又カ）と見得申候付古き樂にて候哉と相尋候へは比志島隼人殿作にて候若時分御細工被成候節貰置申候由

一豐原統秋（ムネ）と申人京都え居住いたしゐたる艸庵への後口に大成松木有之由夫松風別て淋敷候に付艸庵より詠候由

山にてもうからん時のかくれ家や都のうちの松の下庵

と被致其比西三條逍遙院實隆卿え御目にかけられ候處此歌別て絶章成まゝ此草庵の記を御印可被下由にて松下集と申を御編被下候由澤庵の歌に

うき時の身をかくすへき山はあれと忍ふ心そ置ところなき

と申歌を正木のかつらにて見申候由咄いたし候へは其歌とは少々違候由咄にて候事

一鴨長明と申人はよき隱者にて候哉相尋候へは別て勝爲申人の由四帖半を宇治の山陰に結ひ一世帶を此四帖半にて相仕舞惣て世間え被出候砌は車えのせて持越爲申人の由

一加茂士なと退休いたしたる名を蓮胤(レンイン)と申候由

一長明の時代歌御撰集有之候砌長明は名を不記歌計を被差出候處に定家卿なとにても候哉其歌を御覽被成此歌はよほと上手のよみ爲申歌と相み得候へ共川の月とやらに候へは此當の小川こそ聞へかね御自身には御存も無之由御咄之趣長明へ申聞候へは流石御知人程有之此富小川は中々御存は無之筈と長明被申候由其歌に

石川やとみの小川の清けれは月も流て尋てそすむ

右富の小川の事加茂の社頭にて別て神秘の事の由左樣成神秘にて候へは中々御歌御名人と申候て御存は無之筈候故よき御評判と爲申人

の由

一嵯峨問答と申書籍をいつそや見申候に嵯峨え居住いたしたる學者の由其内に儒者によりては出家を嫌ひ一座も不致程の儀候由此事別て惡敷と書申候由子細は出家道に違ひ異端にては候へ共其佛道の奥儀に至り候所まて寒暑風雨を不厭辛勞致候は中々儒者の及所に無之候やはり打はやりの儒者とて書籍に事をあつけ候却ておかしき事と爲申置候由靜隱咄にて候事

一澤庵和尚御歌に

獨すむ庵とはいはし夜なゝ我かかけみへて月もすむなり

直に此御歌此二枚敷之景にて候由

壬十一月廿二日

一此間珍敷雪相み得候に付旁を以靜隱殿方え見舞候處掛物かゝり有之候其掛物に

詠雪中鷹狩　和歌　兵部卿幸仁親王

あかすなをいまひとよりとかりゆかんくまゝする野は雪を光に

有之候夫より靜隱殿え申候は此御懷紙は扨々珍敷物にて候由申候へは木村四郎左衞門掛物にて候此は林庵於江戸求置候て出所も正しく御人品と申後水尾院樣御代の親王方にては幸仁親王ほとの御方は無之と申され候左候成を求置爲申ものにて候御下書と相見得候扨此掛物從此間懸け置申候に誰も噂も不仕候今日下咄見舞候に珍敷ものゝ由申候へは今日初て客より被譽申候て嬉敷存候由咄にて候事

一將監殿より御家來にて茶入二探幽掛物一幅御憑被成被見候折に參見せ被申候に一つは織部燒と相み得底に一字有之候へ共四人の內にては無之扨々見事成出來格好宜敷ものと被申候一ッは御國燒にても可有之哉古帖佐なとゝ申にては無之候又探幽は若時分の筆にて見事成

物候由被申候事

一拙者薄茶碗三釜一掛物一賴見候處掛物は當分拂物に有之候を江戸より取寄置春浦の掛物にて候是は別てすくれたる物にて候靜隱殿にも春浦の筆は未見不申候へ共相替りたるもの候由にて書出しはりんさいの像に有之未は春浦自心の發命にて一入珍敷候由被申候咦と書留有之候は存候哉と被申候付不存旨申候へは大ふて言を申たる事跡にてしゝと申意にて候たとへは八重の山にて今日虎を見申候に申候跡にてしゝと申意の文字にて候由左候て拂物の儀候へは相求可然哉と申候に是は則相求可然由被申候扨又此釜はいか樣成ものにて候哉申候へはあしやのかた釜と申にて別て珍敷候由此釜は圖書殿御宅へ有之候釜にては無之哉と被申候付いや是は內記殿所へ有之候釜にて候由申候へは二ッは無之筈候いか樣圖書殿御方抔より參居事共にては

有之間敷哉と被申候別て賞し被申候事茶碗は一ッ古き吳州にて紋から薄く一入面白く候由一ッは高麗と相み得候由被申候事

一先日將監殿御出被成候節是より直に拙者宅え御出の由御咄にて候今晩は廻り手前被成候由御咄にて候誰か御指南申上候哉と申候へは有馬休佐え御聞被成候由承候定て拙者事も休佐へ習候哉と尋被申候に付成程休佐え習申候由申候へは夫に付咄有之候先古の古き人の咄にも茶道手前とて見事に致儀格別成事に候俗手前とは又違申事候拙者抔いたす事には手前は見事に無之社心有人の見る事には却て宜敷候あまり手前の奇麗成は不宜候由子細は袋をあつかい申候に結を引茶入を持上け茶入を出し申事に候是は御物のものにて大切に致所より右の通事候又茶碗に湯を入茶釜をほふし候に音も少き樣にいたすも同しく大切に仕候所よりいたすものにて候何我か物にて候へは左樣

成事は曾て無之筈也先か樣成を茶道手前と申昔より相知爲申ものに候手前を能仕候に肝要成時はいつにても茶道を賴立爲申時は相濟事にて候夫々俗のいたし樣も同く有之候ては却て心有人の見爲申時はおかしく候又候夫に付咄御座候昔助之亟殿え御茶湯に靜隱參被申候炭手前を被成候時白炭も手を以御くべ被成候由其時の御挨拶に私事ははしあつかひの不調法成男にて却て宜敷有之候か樣成事も候故あまり手前を見事に致候は却て惡敷候由夫共に事を廣く古き衆抔へ承候て能候靜隱殿にも眞臺子抔は不被存候由其時にあたり一通習申候へは一通の手前さへよくほとけ有之候へはおのつからまかるもの候由被申候事

一右に付申候は手前はよく不致候共事は廣く習候ほんと存申候由申候へは夫は成程能候靜隱若時分島津助之亟殿御茶之湯に逢申候に付炭

前の折から被仰候は別て箸のきかぬ生付とて白炭も同しく手を以被成候は見事に有之候由

一八條智仁親王と申上候は名高き御方にて候哉と申候へは何そ歌道に名高と申にても無之候細川幽齋老丹後みやつの城主の時敵のかこみ候を禁中に相聞得幽齋は古今の傳授の人にて其時禁裏へも古今御傳授無之事故勅使烏丸樣西三條實條卿兩勅使にて圍を解幽齋を御指南に被召候由被申候へは一時に圍を解京都え御參候也其時禁中え御直に御傳授は難叶候故八條智仁親王え被仰候智仁親王より御傳授有之候由夫を以于今智仁親王と申上候御事に候由其後肥後五拾萬石は被下候事の由御息三齋老は右の事を武士の本意と不被思召歌のうの字も不被成候て御慰には茶の湯を被成候故京都杯にては別て三齋老御書跡幷茶杓を致賞翫候由

一此間雪間み得候節念佛に艸庵へ參候に飛咲の梅有之其上に雪降りあまり殊勝に御座候折角古人の詩の梅に三分の白をゆつると申事共存出候由左候て咄にて候は壽國寺玄默取持いたし候掛物に隱元の墨蹟にて候其句に梅花雪裡開と有之一行物にて何の手もなく能句柄にて候由咄にて候

一將監殿より拂物の由にて遣被置候織部の茶入くり返し被譽申候京都なとにてはあの通成物を譽申候由右瀨戸杯は似せ多紛敷候故きつはりと正敷物を何邊によらす賞翫致事故右の茶入は出來と申格合旁以宜敷候由也

但右の茶入將監殿御方え江戸より八重野玄喜差下候此方え御見せ被成間敷哉と申候へは彼御方は差て御入用も無之故拙者へ相求候樣にと被仰下御持せ被成候故相留置候事

十二月十三日
一先日罷出候節從將監殿御遣被成候茶入私方え參候由申候へは扨々よき茶入相求候由右茶入得と相考見申候に了新兵衞茶入と存申候由了の字のくつしにて一文字かと覺申候夫共に慥成儀は覺不申候へ共形模樣よくて新兵衞風に御座候由

一大原貞以殿事香利の指南を被致由承候御手前にも香きゝの事は委敷御存知被成候哉と相尋申候に成程貞以事は信證院樣能御存被遊不殘貞以え御敎被遊候夫故能爲存筈にて候靜隱事は一圓香きゝの儀は不存候先靜隱こときの貧者なとの可仕業にて無之候何樣に相求度存候へ共中々相調事にて無之候夫故一圓香は好みに存不申候先は別て嫌ひにて御座候唐人は伽羅を手に涯(マヽ)り香を燒と申儀は大切成もの故無之事の由候然に香を燒候なとゝ申儀は別て恐多事の由咄にて候同しくは女姓道具かと存候由申候へは成程其通の事にて奥方樣杯の被成事には能き御慰にて候聞及も候はん紹鷗と爲申茶人は香きゝの上手にて炭前をいたし候前以下火より香爐に入直に伽羅を出し返し爲申人の由其後於小座伽羅をたき爲由人先近代には不承候

一中納言樣御事別ての香御好きにて御座候由今以御座候哉近年於御納戸拜見仕たる儀御座候白木の箱に二ッ目を明下は香を御燒上に御衣裳を被召置たる程の御好にて候由夫に付いつそや島津十太右衞門殿宅にて中納言樣の御琴一面三尺計の細きのにて候右に付たる御爪をつゝみ紙も古く相み得候へ共手に取匂ひ申候に其時迄は別て伽羅の匂ひ相殘居候由夫は同樣成事にて匂ひ申候哉と申に伽羅を濃き煤(ス、)の如く煎出し右包紙に御ひかせ被遊事と承傳候是は畢竟御風雅より出たる御慰かと存候事

一山下御屋敷より卽宗院殿便に東照方え御讃御賴被遣候段承右繪に御

自讃相濟參候由承候歟定て貴樣御繪の事候へは右御讃も爲被成筈と存申候いかゝ被成御覽候哉と申候へは成程此間山澤五右衞門殿御使にて拜見仕候皆共によき御歌にて候然共此比に柳原光綱卿の御讃相調參候故鹿兒島の歌よみに先比よませ置此節四季の繪共に御讃相濟申候間引合申候扨其分は當分平田元右衞門病氣にて引入被在候間慰に見せ遣候由咄にて候故其歌も見不申候事

一今日も如例薄茶を立被申候茶碗は內黑の外桃色のふるき樂燒の由被申候吸物杯は必不斷參候由一ッは出候儀有之事候茶くわしは看經所え自身菓子盆を持入二ッも又は一ッつゝも相つき持出たる事にて候何事も殊勝に相み得申候事

一先日式部殿御方え參候處澤庵和尙一行物に安眠高臥對靑山と申掛物貰ひ申候由申候へは扨々是は珍敷物を相求候由其掛物は大歲殿御代御茶の湯の掛物にて名高ものにて候右もらい申候も御手前御調給候繪二幅御持歸被成候て右代りと存相貰被申候事

十二月廿七日

一先比白石仲右衞門繪の御用にて此節江戶え差越候付二度書狀を遣し候に於御前繪を被仰付書申候由右の繪模澱も書申候て遣候由一幅は枯木にきとつき（つゝカ）一幅は芦に鷺一幅はふくろうに小鳥と申遣候由

右の繪咄終て梟の繪の事より咄し何かにて見申候由梟の句に夜察十里の山と申候由珍敷存候事

一此間從將監殿茶碗數々御もたせ御見せ被成候に樂燒七ッ古き相應成もの參候其外に白燒にすくれたるもの參候此茶碗は鹿兒島にも五ッは相覺申候先肝付彈正殿御所持被成候さゝめき今一ッは脇方え有之候を波江野次右衞門當分所持仕候今三ッは誰々と被申候得共致失念候右茶碗御見せ被成候よりも格別に宜候由其茶碗を相考候に波江野

次右衞門此比及困窮候由承候故多分次右衞門抔拂に出將監殿御方抔へ爲差上共にては有之間敷哉と存罷在候に付波江野次右衞門參候故右の趣相尋候處やはり所持仕候由申候故不審に存罷在候いつかたの茶碗にて候哉と被申候に傳承候出雲殿御所持の由申候へは扨は左樣にて候哉扨々珍敷ものにて候と申候事

一苗代川え御判手と申もの有之候哉と被相尋候へは曾て不承儀に候田原家は御判手有之候此御判は堅に長き御判にて候帖佐は存の通にて候由被申候事

一古き咄の儀加入より承候故咄聞せ可申由にて候惟新樣高麗入の己後高麗人多く被召列候付其後高麗町え被召置候由當分榎御座候處を本高麗町と申河向を高麗町と申候由其砌何の業も無之渡世難成候故方々へ身を賣り分散致し居候處寛陽院樣御若被遊御座候節高麗人方々

え分散いたし候ては惜きものと被思召上一所に被召置度方々御聞せ被遊候に身を賣たるもの共故引おひ候身代銀抔有之といふも暇難申段被聞召上夫より右方々え罷在候高麗人え身代銀等上より被成下一所に當分の苗代川え被召置事の由左候て高麗人は茶碗も能く燒候もの候ゆへ御燒せ可被成思召にて候へ共中々燒調者も無之加入抔若き砌皆共茶碗燒樣敎爲申事と咄いたし候然に當分も古き茶碗抔を見申候ては是は古き先祖か燒たる抔不屆事申と加入咄いたし候由珍敷咄にて候事

一樂燒の儀に付ては鴻池道億所持いたし候古樂を見申候ては外に段々樂燒を見申候へ共似寄候ものも無之由被申候事

一道正庵のしう純と爲申者は當分の道正庵か親にて候是は道元和尙入唐の時草履取にて入唐いたし候其子孫にて候御家に付ては別て御由

緒有之物に候道鑑様京都え三四ヶ月つゝ御詰被成候節町屋え御借宅にて候に福昌寺石屋和尚折節在京にて御旅宿え被參候てケ様の町屋御借宅にては別て御不自由の御事に候左候て道正庵と申もの候此者は少々家居も廣く御座候間是へ暫の御滯在と申なから被成御座候様に被申上其後は道正庵え御宿被成屋敷を少々御求被下候由先ケ様の御由緒も御座候

一龍伯様より道正庵え御意候は高麗人を數人被召列候壹人可被下候間召仕間敷哉と被仰候へは難有奉存候と御受申上候に付被成下首尾能道正庵方え奉公仕候由左候て道正庵より後は妻をもたせ申候に女子壹人出生いたし今に乍老衰存命の由しよう純咄にて候靜隱不取敢咄被申候扨は左様にて候目が赤くは無御座候哉と被申候へは成程目の眞赤く御座候由返答にて候に薩州に于今高麗人一所に罷在候所御座

候其所の女共は皆目が赤く御座候由申候へは道正庵横手を打扨ては左様成事にて候と驚申候由

一關ヶ原亂の後惟新様被召列候人三四人道正庵かゝへにいたし圍置候處關東より御さつとうを被入候砌候故道正庵かゝへにては無覺束存候故近衞様え右の段申上近衞様御かゝへにて道正庵か宅え召置候處其後殿様御下の儀承及右三四人近衞様え御暇をも不申上罷下候由然處に龍伯様惟新様道正庵別て世話仕段々丁寧にいたし近衞様まても右の段申上難有被仰付を何の御沙汰も不申上罷下來候付咎目申付未御目通にも御出し不被成候就其段々世話の由御申分の御狀御直筆爲被下置義御座候畢竟其文言に田舍者の由相見得候右の御狀並に諸書付等段々御由緒の事多々有之候を靜隱には拜見いたし候由咄にて候事

一道正庵え惟新様より被成下候古帖佐墨藥の御茶碗に白藥にて十文字を書爲申候を靜隱にも拜見申候由別て結構成御茶碗にて候道正庵承順と申たるは土御門殿妾服の御子にて候由當分其子も爲差立人と承及候由

一淨國院様御上下の砌京都瀨尾中島道正庵抔參上申上に御不快共に被遊御座候節は瀨尾中島えは御逢不被遊然共道正庵えは御居間に御呼被遊色々と御咄被遊候故道正庵も御取分有之別て難有奉存候由折々靜隱え咄共申候由

一道正庵え太閤様より何歟にて千石被下置候處關ヶ原の後關東より被召揚候由其後段々咄より靜隱被申候は唯今も其通有之候はゝ可宜候段々と移替り候由被申候に道正庵打笑成程其通と申候事

但道正庵承順は茶人にて候由

一今日者歳暮として酒肴抔持參いたし候に披き有之候終て自身手前にて如例安座にて候茶碗は墨藥の唐津にて數年持來り候由夫に付先は此茶碗も鹽筒成にて候此鹽筒と申人は茶碗に燒候ては過半無之由然共用なれ候故鹽筒とて用え此墨藥の茶碗もいか樣鹽壷抔に爲燒もの と相み得候由被申候右終て歳暮の一首書付見せ被申候別紙には直筆有之候得共猶又此に記置候

左に

年暮るゝそのいとなみに人とはて山にはあらぬ庵しつかなり

と書付被送候

寶曆七丁丑正月二日

一歳頭の爲祝儀參候處年内約束申置候吉書唯今書仕舞候由にて看經所より持被出被送候右吉書はよりふくの玉の上に黑く筆つかひ有之是か字もなきやうに人は存候へ共曾て左候にては無之手よふを被致陰

陽〳〵と筆つかひ有之六ヶ敷物にて候由右咄相濟歳旦の歌の由にて見申候

新玉の三の始のゆたかさを雪に見せたる春はきにけり

と書置被申候左候て此吉書のよりふくの玉も三ッにて候三の始と讀おふせ候由物笑に被申候

但右歌には雪も當年は最早兩日相み得候故明朝迄は降可申被存候猶三の始とも申候事

一福昌寺殿より此吉書をいつそや賴にて候處よりふくの玉ばかり書くれ候樣に承候子細は常の吉書に下は熨斗を書申候故右の通の由是又物笑にて候事

一靜隱殿床え近衞樣御詩の掛物かゝり有之候に杜門烏樸啜茶翁と有之一句有之候其句を以掛物にも有之候通靜隱殿には先年京都え被居候

砌近衞樣御門前被通候に門番と見えたる者共白丁を着烏帽子にて圍爐裏に火を燒眠り被在候いかにも右の詩見申樣に有之候由扨又禁中の御心を雪と見申候に瓦のつまり〳〵は全滅金にて其上に雪相み得いかにもめつらしくあの樣成雪は終に見爲申事も無之候由

一歳頭にて參候故年酒と有之段々と盃抔いたし候右終て祝候て又薄茶を一ッ立くれらるへき事と被申串の柿を持來候樣に宮仕いたし居被申候孫殿え被申其跡にて串の柿と申に付ても上み方夕と御國ののノ字つかひの言葉にちかひ御座候由先御國にては串の柿と皆人申ならはし候へ共上方にては串柿と申候又御國にては山の芋の事を山芋と申候是又上方にては山の芋と申候先此分にても別て風流に聞へ申候由夫より申候は都て御國の言葉はひらい方は聞得候由申候へは古き言葉は總て御國え殘り申候由然共近代にいたりては琉球言葉と押ま

せ申候故ことの外おかしく聞へ申候と物笑咄にて候事

一今日も如例薄茶にて候處茶碗は與八か燒くれ候由にて新茶碗にて候右にて追て罷歸候て年頭故門外迄おくり可被申由承故段々斷聞け申候へ共是非門外まて可被出由にて於門前禮義をのへ被歸候事

但山本指散太殿にも內證え被參居其內は咄共申候事

正月廿四日

一昨日より到今日殊の外餘寒にて候得共無御痛目出度存候由申達候得者いや昨晩よりの嚴寒に目も見へ兼耳も一入遠く生て罷在候までと被申物笑にて候

一掛物を見申候に實陰卿の御懷紙にて候別て珍敷の由申候へば先年京都え被在候節五十餘にて旅もいやに存候年生にて外に何そ望迚も無之實陰卿の御懷紙は何とそ相求度念望の故町人なとへ賴置候へは實陰卿御懷紙は御存命の時より中々不相調もの候得共先承置候はゝ不

圖見當可申儀も候半左候はゝ則可申聞由申居候て罷在候處に彼御方え御立入の御醫師にて候由所持いたし居候を相求候由

禁中御會の時の御下書の由

春日同詠風光日々新　和歌　正二位藤原實陰

なかき日のかけをふまゝにおひ立てわか葉もちゝの春のわかくさ

一鹿兒島も別て廣き事にて御座候此間無双の物を見當申候先見せへき由にて左の通但別紙にも寫し置

色即空ノコヽロヲ悠
ソレソトモ分ヘキ色ハ
夏木立ヒトツニノ見ユル空ノ緑ニ

近衞殿堀川禪閤基熙樣御筆の物悠見叟と被遊候先此樣成珍敷ものも御座候是は西田町蘭□田と申酒やの子に小二才御座候此者こしやく

なものにて貞以抔へ參歌をも讀茶湯抔も仕ものにて御座候ゑしれぬ事に先好き申たるものにて此者大身成ものにて先比伊勢え參詣いたし候節上方え知人御座候て珍敷ものも候て遣くれ候樣に歟賴置此節參候もの候由悠の字有之御名共委細不存難見分何樣のものかと見せに參候故夫より申聞候は近衞家凞准后樣の御親父にて御座候天下に名高き御方にて候由なせ此事に付悠の字の儀を存候は靜隱殿京都え滯在の內滿若樣御側え相勤候女中尼と成藥師山と申所へ這入居被申候其外尼寺近邊にて候故坊中にはいくらも尼の衆多く御座候其滿若樣え御奉公申上居候尼は能々能隱にも被存居候故被參候に近衞樣御筆の色紙御座候其下に悠見叟と被遊置候歟此色紙は數年持居候へ共御望共候はゝ可遣申と被申候時右の悠の字拜見仕候て左候て近衞樣方え其後參上の折御側の衆え悠見叟と申上候は誰樣の御ことにて

候哉被相尋候へ共誰も不存由返答にて候又其後家凞公え探元より此間右の趣を我々え相尋候へ共不存之旨申候碗誰樣にて候哉と申上候得は准后樣別て御立服にて扨々いつれも心懸無之事に候第一は人も可有之に探元抔可相尋候に不存と申は別て不心懸の至に候あれは堀川太閤樣の御名にて候と被仰候て其後御側の衆より右の趣御しかりに逢候由靜隱え直々話にて其時悠見叟樣と能承知仕候由此色即是空空卽是色と申は經文の第一の事の由先是に付佛法の事は存も不致筈候間講釋仕聞すへき由申候て承候趣左に記色即是空は此天地の間は丸きものにて候やはり太極の道理より申丸き所は卽空成ものにて候又空成所に色有之ものに候故第一は左樣成事をとり御讀被遊候御歌と相み得申候ソレソトモ分まへかたきいろはないといふ意にて夏と言なしなとゝ云に同しないと云意にて木立と申又夏の時に到候てはは

ヒトツニ空も青く木立も青く同し色といふ言を返してソレソトモと云意と相み得候間勝たる事にて候先ケ様の珍敷ものを求候上は四月抔の比一服立候様に申候へは畏たる由申被歸候事珍敷事にて候

一雪舟の寫鍾馗の繪懸り有之候故いつ方に此正筆御座候哉と申候へは圖書殿御方え御座候を若時分繪本にと存寫置申候由被申候事

一此間諏訪兼利の繪を見申候に其内に色即是空空卽是色と申歌を書添此歌ほと感し覺候は無之と申文言有之候其歌に

色も香もなきこそ本の姿なれなくて花咲春も一時

と有之候いかゝ御座候哉と申候へは是則太極を申たる事にて候扨いつそや見せ候様に被申候故近日致持參可入御覽由申置候左候て靜隱被申候は諏訪杢右衞門殿と爲申人は勝たる人と靜隱には被存候由其子に仲右衞門と申候て御座候此人とは別て心安有之候由仲右衞門と

申人文方も有之武藝も有之佛道も有之御用筋も人々譽申人にて御用人迄は致事缺もなき人にて候樺山主計殿抔も御心安有之候右仲右衞門殿一子に仲太郎と申人有之早く致病死候へは仲右衞門殿夫婦共にとんと氣を打無程不幸にて候由仲右衞門殿不幸の儀披露有之候處に總州様にも兼てよく御覽被遊被爲居と相見得おしき者死子たと御意にて候由誠に涙くみ咄被致候事

一大坂より去十月の茶の口切より其後の會席付下候由にて咄にて候は上方程御座候てめつらしき物段々有之候由にて其書付は賀右衞門方え召置申候間見せ可申由被申見申候に段々と珍敷飾附にて候其内に皿にからしあへと有之候是なとは別て能取合と譽被申候其内に客附の場に長青庵と相み得大形客にも右の名有之候是か功あるへきものと見へ申候由左様て右長青庵か亭主前の所を見被申候に段々と働き

有之面白き取會にて候故大躰の者にては有間敷と被申候事

一右の飾付の内に茶碗にこひきミと申有之候是は世に稀なるものと承及候に上方程有之珍敷道具を出候由咄にて候左候て此こひきは高井戸時代のものにて御座候由又加入か親咄候由承候はこひきと申ものは熊川のくわんに似てあの樣に白色にては無之出來もやわらかに荒く作たるものと申たると承候歟是なとよりよきものも外には有之間敷と被申候先右の分のこひきの目利と承候由

一麁茶有之候間相立可振舞由被申候其外に御酒たべ候樣に承段々とたべ候上吸物抔被下候て自分看經所え被參茶菓子を盆に請出被申候左候て例の安座と挨拶有之手前にて濃茶を立被申候茶碗は御判手白牡丹の細工にて中に丸角の御判二有之候茶入は此日は望不致候歟目に觸候所利休時代の瀨戸にても可有之哉と存候樣に御座候茶は三入か

後昔にて候左候て茶碗を望み見申候に拙者持合候茶碗よりは藥立も違ゐ申樣に有之候故いか樣成事にて持合の茶碗とは違申候歟と相尋候得は此は白藥にて候故ケ樣に藥立替り申候由扨持合候蓮の葉と此白牡丹も細工は同し細工にて候由是は惟新樣御側え被召仕候木脇休作と申候て關ヶ原の時も武功も有之其上細工別て能有之候故何を作れ〳〵と御意にて都てケ樣成右の木脇休作殿と爲申人の細工にて候蓮の葉も右の細工にて候由被申候此咄は加入より承置候由木脇は賀左衞門殿先祖にて候事

但他所の人は不存事にて候

一國分正國寺咄被申候由承候は拙者逢可申由爲申と申候哉と被申候故此間將監殿御宅え正國寺御招被成候由承候故其折隙を得候はゝ參候て逢申度由將監殿まて咄申置候然共其晩にいたり隙入之候終て扨正

國寺は茶碗燒物の類はあまり目利は無之又書畫は一切目利無之候然共切れの類は別て目利强候ものにて候是は數年奈良京都え被在候故左樣成所を以見馴申候由先珍敷男にて候いつそやも咄申候通珠光流の家の何某失念右に被習候薄茶手前を望申候樣に被申候事

一罷歸候に內證口迄被送候に當分月智梅盛過候程に有之落敷候を見被申雪のごとく御座候由被申候事

二月十六日

一床に歌書の切れを表具いたし候掛物かゝり有之候故誰か手跡にて候哉と申候へは今日は西行の忌日にて候右掛物の歌は歌合抔の古き歌の由候へ共西行の手跡にて候故今日は掛置申候由咄にて候又床に古き出家の像作り有之候故何樣の人の作にて候哉と申候へ者夫はおかしきものにて候諏訪杢右衞門殿西行信仰にて直に今日おかみ被申候樣にと自身西行の像を作被爲置候ものにて候其後段々と取散子共の

遊道具に被成居候を木村四郎左衞門求置候由直に夫にて候夫故靜隱殿も西行信仰の事候に付今日は飾置申候由左候て前に櫻の花を花入二つに活け候て右木像の前被置仙香も有之候又柱かくしに色紙有之候いか樣東照方御筆と相み得候

おしなへて花のさかりに成にけり山の葉ことにかゝる白雲

と有之候右歌も西行の歌故押有之候半と被存候右尋申候事共終て咄に西行辭世の歌に

佛には櫻の花をたてまつれ我なきあとを人とむなはゝ

と申候佛と申も自身西行の事也夫故今日は櫻の花を手向置申候由又ねかはくは花のもとにて春しなんと申も大形ケ樣の事に似寄候由

一右咄終て珍敷もの候間可見由被申見申候左の通御旗本神尾左兵衞樣御茶道具附幷献立客三人　雪の夜

小竪物掛物長く表具桑山氏物好き惺々翁自畫賛圓窓の内に牧童雪の山水丸五寸計有之候由丸窓より見申候景にて見へ申候上に歌二首雪中の意

一茶入　瀬戸春慶かき出來上もの候由

一茶杓古織公作　筒あり折ため

一茶碗　狂言袴

出來井戸脇堅出來にてこふだいはけ客の内龜や庄兵衛詰目を驚申候由

一水さし古備前角丸筒

一花活　宣德年製唐かねねち形留

はな　寒紅梅

一爐先キ六角香爐に香炷(マヽ)候て直に手あぶりになり候由

一掛物　山自滴齋此通にあり小横物水に岸のあいしらい

一立花

後炭四方せんじきぬた

一坪山吹かゝり　献立薯蕷(ショヨフ)麩　汁白味そ千切干大根

大平はせ　かれわ　きす

但三色其まゝのいり菜

引物　煮しめ一方に音あり　焼とふゝ一方に花ふし

以上

右の通に候扨神尾左兵衛様とは神尾織部殿御子孫にて備前殿と申たる御茶人の御子孫にて候めづらしく御功者と此書付にては相み得候此書付波江野次右衛門え玄喜より遣申候由扨右茶杓の下書に折ためと申候へは爲何事にて候哉と相尋候へははたと折れたるを折ためむかしの人は丸く有之候曲の茶杓は好み不申候由承及候左候て自身け

つり被置候茶杓被出是も大形折ため共可申程の曲にて候由扨又此茶碗狂言袴はいか様古田織部殿抔時代よりの御所持にて候はんと此書付迄にても扨々めつらしく存候由此庄兵衛と相み得候はからものやにて候又これへ一ッ御功者の處御座候爐先キ香爐を出し置雪の夜の事故手あぶりに成候扨々面白き被成様にて候又相尋候は掛物は尙信と相み得候上の山は爲何事にて候哉と申候に判と相み得候水に岸の相しらいは岸浪と相見得候いか様出來繪にて候半と被存候由又献立の内大平にかれわと相み得候は存候哉と被申候故不存通申候へは御當地にて申かれいの事にて候左様の事は段々と申ならはしに替り申ものに候夫故御老中様御招請の時抔の御献立を御料理衆に承漸く此事と存ほとの事も御座候承候上は跡にて爲存ものにて候此書付の通献立を以いつそ茶の湯いたし見候様被申候事

此比は茶の湯抔は無之哉と被申候故曾て無御座由申候へは將監殿にはいかゝと被申候故當分病氣にて出勤も無之段申聞候處いか様成御病氣にて候哉と被申候故か様〳〵の次第と申候に扨々にか敷御事候いつれ御年若にて候故早く御快氣可被成候御若く被成御座候と申候ても第一御養生方は不被成候て不叶事に候世悴賀右衞門を以内御玄喚より御尋申上候様に可致被申候

一新納又左衞門殿御親父に内小山と爲申御方御座候由卒度見申たる御人にても無之由然共咄に承及候儀御座候九十比迄御存命にて御隱居の時は當分樺山左京殿御屋敷の次碁原に其時御隱居普請にて被成御座候由夫故ゆう山やまとやら其節申ならわし候右ゆう山老御年若き時分より廣き御書院の戸を自身御立被成候か先養生の初りにて候由御老後の御咄を承及候こゝの養生次第にて長命の事と御存爲被成不

斷御養生を被成候に御若時分の御養生の始りは右の戸たてにて候由是は思ひ有事と計被仰候て右通成事は其時誰にも御咄無之と承及候由か樣の御心懸に候へはいか樣にも參ものと被存候由左候て右ゆう山老七十餘歳の御時是程迄養生も究候故耳かつふれ候ても儘二十匁の鐵砲を射て見たきと被仰候二十匁を直々被爲射候に少も御障も無之候と承候中々當時の老人なとの中々及所に無之由

一小平太殿より唐紙八通八枚つゝもたせ被遣靜隱殿え賴に上中下を分遣くれ候樣に被仰候故此日賴見申候に八枚共に舌を付見被申候左候て此一の字有之候唐紙は第一と被申候其外も都て能き唐紙にて候由此唐紙の見樣は舌を付見申候に散不申を上とすと被申候事

但ちり申紙はあしく候由左候てかたきもよふの紙の能く候由

一小皿にてひたし物出候に付今日は西行の忌日に候故精進いたし候間

此おかしきものを肴出候由被申其跡にて銚子被下候左候ておかしき茶御座候故たへ候樣に被申直に菓子も無之例の安座にて手前候左候て茶碗を見申候に樂の赤き古茶碗の樣子に見及候故相尋候へは先年京都え罷在候節鴻池道億自身燒候由にて送り申候茶碗にて候此に付咄御座候移れは替る世の習にて候纔計の年數にて候へ共古今茶人花押數と申小き書物の板行に右道億も出候由にて見候樣に被申右板行本見申候に判有之委細相記有之候扨々めつらしく候由申候事

一古帖佐にうつら藥と申もの御座候哉と相尋候へはうつらふと申候必茶入なとの出來たるには鶉のふの如く有之下藥あるもの候由

一養生方の儀に付身に不相應成世話をいたすか又は存間敷事共氣に掛居候ては究て惡敷筈と存候歟いかゝ被思召候哉の由尋候へは先年貝原篤信編置被申候養生記とか又は養性本とか申二冊有之候其内に病

は氣より起るものにて篤信も年生自身被存付候と書置申され候もの
に常に心にかゝる事なく氣をやすらかに物毎滯なき樣にすら〳〵と
日を暮し高笑も毒笑事はにつこと笑候か能候由相み得候此にて可存
知事にて靜隱殿にも當年迄諸事の事を考申候に朝寢をいたし起あか
らんといたし候にふすまを明け孫抔參候ゆへ目はしかと見へ申不誰
かと申に返答も不致のき去り申候其後にて考見申候に孫抔と存付心
おかしくも有之又は無私子共の致方と考出候ても其時のね寢は快候
或は平日見たき書物を見申候歟又は繪入の卷物抔を見申候歟何かに
つけ氣を慰置申外無之と相考付申候能く〳〵の事にて候半能の狂言
に福の神と申有之候其狂言の內の歌にめようとの間て腹立あやする
な古き酒のんて何とやらと申文言の候此福の神も古酒なとのこいき
酒抔のみ腹立もせすにうわの體先此分にても右の心の如くにて面白

く被存候故とかくに養生はやすらかに有之事にて候はては不藥候由
一お須磨樣御病氣御大切に及あまつさへしはらくは御息も御たへ被遊
候に御側醫師抔より人參抔差上候へはやかて御息を御つき出し圖か
み御意候はもふよかつたに又息つき候こそくとひ事と御意の由然は
人は死る時にいたり大切成物と被存候右御言葉を致承知感涙をいた
し候由咄にて候
一右終て相尋候は御歌抔も爲遊御事にて候哉と申候へは御側にも常に
歌書抔は被召仕候內々は御樂みに御讀被遊候へ共人には御見せ不被
遊候と被申候事
但不斷の御身持替りたる御じんしよるの御方樣にて被成御座候
由凡人ならざる右御大切の涯の御咄感心仕候
一串良柏原にて網引有之候に其觸を以申渡候書付委細に申達入一覽候

處是は先年見申候久々にめつらしく無双の物を見申候故右書付くれ候様に被申候故則進せ置候右終て古きおかしき咄の由ある田舍にて郡奉行御さく入と觸其後村はいつ方に御泊りにて候間娘達したされ御酌に被參候様に老人の功者の下役ふれ候右の通申觸一二町も行ぬけ此様な替つた觸は初て觸れたと申候をよそながら承及候もの有之無双の珍敷事と大物笑にて咄被申候事

但いつ方田舍にても郡奉行御入とは不申御差入と申候左候て夜に入役目抔參御草臥も候半儘燒耐にても差上可申由にて女は酌取に召呼申事の由候夫故右の通今晩は御酒もり候故隨分したされ被參候様にと申觸跡にて此やうな替りたる觸は初てと觸申候事中々筆舌に難盡物笑被申候事

一琉人の僧に何やら申人相を見申事を致傳授候者の分を見候に人の歩

むにかどにてあゆむ人は長命に有と有之候いか様左も可有之事の由あとのこわき所は腹に能通して近所の由爪先にて歩む人は短命に有と有之候人を段々と氣を付見申候に多分は右通有之事候先長崎唐人屋敷にて唐人百足を踏時は腹をつき出しあとをつよく踏付おかしき様子にて歩み申ものゝ由

三月廿九日雨天

一おとゝしより御下屋敷え參上可仕由御側の衆より承いかゝ可參様に可有之哉と被申候故兎哉角參上可仕由申置候へ共去年は右通の御沙汰も無之候處に此間廿五日參上仕候由左候てお嘉久様御前え被召出候處難有御意有之候は段々と繪の御用被仰付其上お嘉久様よりも時々御用被仰付大儀に被思召上候依之今日は御禮として御庭の牡丹を拜見可被付由御意にて誠以難有奉存候由左候て其日は繪も被仰付事にては無之候由然共自分より御側の衆え申置候は苦ふくさ物抔被仰

付候はゝ相認め可入御覽候由申置候へは隅州樣御前にて可被仰付由
にて六七枚程相認め候由左候て右繪を御下け被遊於御前書調候由相
記差上候樣に被仰付候由にて今日參候て右繪に名判いたし置候間見
せ可申由被申候て右六七枚見申候に丁丑三月於御前揮毫と有之其下
に大貳法橋七十九才と相記又外に三幅對二流是も右同樣に銘有之候
故是は右の通御前にて御書被成候哉と申候へはいや夫は於宅相認右
の通同く於御前書調候樣にいたし差上候樣にとの事候故右の趣相記
候由其内に龜の繪有之是は典膳殿其時御詰合故御拜領被成候由承候
扨又右七枚の繪を相認候時隅州樣御意にて御望被遊野駒相認候由に
て是又其内にて見申候左候て隅州樣御意被遊候は靜隱事年寄に成候
はんと被思召上候得共やはり年も不寄繪も昔の通りにてと御意有之
候由段々難有奉存候由咄にて候左候て右席書被仰付候以後はお嘉久

樣御方え被召置段々と御馳走被仰付其上京都酒の結構成を二酒頂戴
被仰付御料理迄被成下候へとも年寄はをかしきものにて何か有之候
も見分かたく珍敷ものは頂戴仕と乍存得不被下候御濃茶御薄茶迄被
成下冥加至極奉存候處十太夫殿御取合にて何かと御咄共申上候樣被
申候て利屈共申上御暇申安堵仕候由左候て右の繪を今日差上候樣に
可仕候間四郎左衞門參居候間相渡由にて一ツ〳〵羽箒を以繪を被箒
被差上候由其座にて見申候事

一掛物有之　蛙うくひすのなきつる花は春ふけて影見ぬ水にすむかわす哉

弘資

と有之候此歌の花は何花を讀爲申ものにて候哉と申候へは梅や櫻の
事と相み得候是はおかしき事にて候先年江戸にて右の歌を承扨々珍
敷御歌と爲申居事にて能覺へ被在候處京都え參候節平松樣より拜領

被仰付候故扨も此歌は先年より覺へ居候歌にて候扨々ケ樣の事と難有奉存頂戴仕置候由左候て右日野弘資卿は佐理樣を堂上方にも御書被遊方段々有之事候へ共弘資卿程に能御書被成候方無之候申事の由一從此間蛙も鳴可申と折角耳をすまし承候へ共不得承候乍然靑かへるか庭の木の枝に鳴候を承付面白存居候處に夜前下人小二才か只今此庭の石鉢に蛙かなくと申候故耳をすまし承候へは成程能耳に入り扨々面白と申たる事にて候右終て夜前も咄申次第に候下拙門前の蛙か別て聲もふかく面白事と申候定て當分はなき申にて候はん被申候故別て鳴申候由申候へは右蛙も只今の比か珍敷候後はあまり面白も不存候由咄にて候

一能因法師の歌に

都をは霞とともに立しかと秋風そ吹白川の關

と被讀此歌は自身出來歌と被存候處より此歌を人に申聞候に白川の關迄參候趣にて讀不申候てはいかゝと被存候故毎日客人等も有之事候へ共留守をつくり十日計も家の上にあがり日になされ色を黑くして誰にても相尋候節白川の關え參候て讀候はんと可申存念にて右の通致居られ客來有之候時は留主と計も過候てある人參候故此間は留守候歟何方え御越被成候哉と相尋候に付奥州方え參候由を申され候に付右の人より申候は定て御歌抔も御出來被成候半と被申候故成程一首讀申候由にて右白川の關の歌を其時被申候由是はむかしの人の正道にて候當分抔何樣に上手と申候ても左樣成實情は無之由左候て能因事は井手の蛙の日干を持居爲申人と覺罷在候に曾て左樣にては無之候或所にて參會の節能因の咄に自身古きものを所持致候由被申於卽座錦袋よりなからの橋のかな屑を被出是は古へながらの橋普請

の時のかなくつと被申候へは其座罷在候加久夜長帶刀節信と申人の私事も一ッ古きものを所持致候とて錦の袋より井手の蛙の日干を被出其時能因法師感被申候由いつれもおとらぬ衆にて候半と被存候由咄にて候右の事は此度袋草紙と申ものにて見當候由直に袋草紙と申を見せ被申候事

一此間民部殿所え參茶の湯に逢申候由申候へは左樣に承候由道具附等は不承候由咄故懷中の道具附披見に入候處に挽切の內に多賀左近と申人有之此人は御旗本にて古田織部殿抔一所にて稽古有之候人にて同門弟にて名高き人の由咄にて候右道具附の內に澤庵和尙掛物も何樣にか承樣に御座候此比に民部殿御求被成たるもの共にては無之哉と被申候故何樣の儀も不承段申候

一尋申候は古田織部殿と申候は茶の湯は誰か弟子にて候哉と申候に利休の弟子と被申候事

一當分の肥前唐津燒と申候て茶碗貰候間御覽被成可給由申候て賴見申候に當分の唐津は淸水燒又は新渡同前のものに候と被申少も譽不被申候左候て被申候は此肥前唐津は寺澤志摩守殿高麗陣の節御船奉行にて此御方なとの御船も差引にて被差越候節高麗人被召列候か此元祖にて候此御方も兩三人被召連候萩にも被召列此三所か高麗の手筋にて候然共唐津は奥高麗の手筋故上方にても唐津は別て賞翫仕候古帖佐田原家兩家熊川手筋故茶碗は唐津ほとには賞翫不仕候茶入は別て上方にても譽申事のいつそや申候通鴻池道億所へ參候節咄申候は古帖佐の儀は古薩摩と申候古薩摩の茶入は上方にても別て無他事ものにて道億にも二ッ見申候由得と見申度と咄爲仕上からは茶入は別て賞翫仕候由候右終て靜隱所持の此比の唐津を見せ被申候て見申候

に餘程古くは相み得候へ共中々古き唐津とは大違のものにて候先比にて能考申候に被申候其時古き唐津の能ものと申候を見くらべ申候事

一右咄の内に奥高麗と被仰候はいか樣成事に候哉と申候に奥の奥高麗とて井戸なとの類にて候都の方にて燒候を熊川抔と申候總て都の物は見事に有之候故古帖佐なとの茶碗茶入の藥立はやはり熊川にて候井戸は田舍細工の故麁相に有之候唐津なとは其奥高麗人を寺澤殿御つれ被成候其燒手故殊の外上方にては賞翫仕候由左候て寺澤殿御事は其時代迄は段々と切支丹多き時節候て何樣に致候哉奥方樣切支丹故寺澤殿にも右宗門の御不審有之家もめしつぶされ候然共茶碗計は于今唐津と申候て此名は殘り居申候

一當分者諸々芍藥盛にて候御好にて候哉と申候へは好と申にても無之候へ共庭なとへ御座候を見申には好見ものにていつれ牡丹を越申ものは有之間敷候と被申候牡丹は花王と有之芍藥の詩に何々として次花王有之候を覺申候由能見立と被申候事

一此間島津登殿御方より稻津典友方へ被仰付候は茶具段々と御所持被成候へ共何たる物も不相知取ませ有之候間靜隱え見分くれ候樣に稻津方へ被仰越候由にて申越候に付靜隱返答に存候分は夫々に相記可差上分申越候へは兩三日跡に登殿御家來醫者に餘多の御茶碗御茶入御もたせ被成總て見申候に大形加入又は京燒類などのおかしき道具計にて其外不存も多々有之由其内に高麗の雲鶴手と相み得候御茶碗有之候模樣は雲鶴にては無之候へ共唐草類のものと相み得候是か珍敷御道具と申上候由又古き唐津と相見得何共しれぬものを赤繪にいたし候もの又古き唐津有之候茶碗は此三の分を能見及申候由外には

中々是に及ものは曾て無之候と被申候茶入には是又多々有之候へ共唯二つか相應に相み得候是は古帖佐にて候初代とは不相み得候二ッ共に二代目か又は初代の末にても可有之被存候其趣を以御家來の醫師え申達候由咄にて候

一下拙作意二首書認め人披見候處暫見居被申候いか樣出來にて候はんと被申終て被申候は古人の作に三體詩錦繡段かの内に有之と覺へ居申候其詩は誰か天竺に行を送り申に十萬里程多少難沙中彈舌授蛟蛇五天到日頭須日月落長安夜鐘

此詩を陳元輔かコハクラニ申聞候は詩に起承轉合と申事候へ共結句か肝要にて候先右の詩を講し弓射るものに譬へて申候は弓を打おこすを起句引込を二句肩に引込しつとしまるを轉句是よりよし惡を離れ射はなす所を結句といたす左候へは右の詩にて申見に天竺に行事故

十萬里程の山川を經る事多少難にて候是弓の打起の所也沙中の水なし川に龍蛇ある故此天竺に旅立僧を喰とすれ共能出家故舌を彈して蛇にさつくると申は先道すからの事にて引込所也五天竺の遠に到日中途の難儀彼是にて頭も眞白に成筈と申すは道中を先仕舞たる事にて肩に引込みしつとしまる所也右次第遠所を來り彼是おもふ内にとく月落て長安は半天に成鐘か響と申はよし惡を離射離所の事也先詩は此心にて作かよきと陳元輔かコハクラに咄いたし候承及候めつらしき詩にて候由

但弓を射ものにたとへ咄被致候節靜隱身すから手やう被致咄の儀能々可考

一此日吸物酒などたへ候上薄茶を立被振舞候茶碗古き唐津にて候惠々唐物の木地にて候茶は三入と申候由咄にて候此間は腰の痛有之候に

筋か違爲申にて候哉安座は曾て不罷成候夫故此通ときつと座を被致
手前にて候を始て見申候

一相尋申候は或人の咄に三幅對懸物に中はたぬきと兎の碁を打候景左
右は狐の皷をうつ所又は猿の笛を吹候模樣の由しかも唐筆と申傳候
の由承及候歟いか樣由緒か有之もの共にては有之間敷と申候へは少
しも不存事に候いか樣日本人の作拵にて候はん少も合點不參候由被
申候

四月十六日晴天

一靜隱殿宅え參申候今日は御尋申度儀御座候故參候段申候へは爲何事
にて候哉と被申御手前事美代爲庵より御傳授被成候由傳承候茶の湯
事に付メヲノコスと申又ハハヽギ今一條は此咄爲申聞人も不覺由に
て此三ケ條別て秘事に被成候由承候定て御傳授爲被成筈と申候へは
此三ケ條の儀は不存候へ共めをのこすと申事は成程存知申候由被申

候故何とそ御指南被給度由申候へは此事は靜隱殿にも別て大切に存
被居候然共無據相尋事に候へは成程可申聞由夫より咄にて候メヲノ
コスと申事はたとへは此座にて申さはとて自身居間の疊より向の床
の掛物をさし小座え入候節始めは掛物かゝり有之事候故故爲見所は
誰か筆と心に存居候へ共左樣成事も不申追付亭主出候砌申候は此御
掛物は誰か筆にて候哉と相尋亭主より誰か被申候節成程左樣にも可
有御座哉と存申候由跡達て申文句にて候はゝ何と讀申候哉と相尋又
亭主より何々々と讀申候由被申候節成程左樣と申候最前小座え入候
節一目にて誰か筆と見及は成程有之事候へ共それと最前より申候は
別て無禮にて候又茶入見申候にも見及は有之共右同前にいたし相尋
候儀禮義にて候是かメヲノコスと申事にて別て唯今迄大切に存誰に
も不申候へ共無據申聞に付格別と存申聞候由扨々大切成御傳授を仕

候て致安堵候由申候へは又被申候はあながちに掛物茶入抔にも不限茶の湯は惣體メヲノコスと申儀か第一ちやと承及候はゝ義と申事は爲庵迄存居外には誰も不存夫までにて不傳の由咄にて候右終て又能きおかしき咄申候寛陽院樣御代に公義の御醫師何某殿名失念御下候節御病氣御順快被遊候以後此御醫師茶道の儀にて別て御功者にて島津助之丞殿抔御方え仰入毎度茶の湯抔有之左樣成時稲留幸阿彌若年の時被出居右御醫師え不圖御尋申上候は茶の湯の法にメヲノコスと申事御座候由承候いか樣御存知被遊候はんと御尋申上候へは成程御存知にて候由被仰候故我々にも折角當分稽古仕事にて候へ共不存由申上候へは御指南可被成由にて被仰候は先茶入をふき居へ置跡を見又茶抔をふき茶入の上にかけ候節右に同しく跡を見候歟目をのこすにて候と被仰候由幸阿彌扨々と申上頓て退出いたし師匠爲庵え翌日

咄て申候は茶湯に付メヲノコスと申儀御座候由昨日御醫師に御尋申上候へは右の次第にて候由被仰候由申候へは腹をおさへ笑被申扨々江戸の衆は廣き所故不存事も爲存ふりにておかしき事を申人に教とて取所も笑被申候由夫より幸阿彌爲庵え參昨日御醫師よりメヲノコスと申儀を御習申上右の御咄申上候處殊の外御笑被遊候歟いか樣右次第成事にては無之哉と申候得は成程左樣成事にては曾て無之候只今迄教來候故此上は此儀は成程可教由にて右最前の咄の趣のめをのこすと申儀此幸阿彌傳授にて其後靜隱殿え殘置候抔幸阿彌より靜隱は傳授にて候由又候幸阿彌え爲庵より右傳授の前以被申候はたとへは右御醫師の御傳授にて茶入をふき置たると跡を見茶抔をふき居たると跡を見最前居る時目を以見て居候事に候へは爲何事かと此時も笑被申候て右傳授にて候由又候或人右御醫師の傳授の趣にて人え傳

授を被致候を靜隱殿え一座にて見被申候心中には別ておかしく存被居候由四元庄藏殿え幸阿彌より傳授いたし置庄藏殿にも右一座にて候故跡達て兩人にて先日のメヲノコス傳授事は何たる事と大笑被致候事も御座候由被申候

一茶碗茶入澤山に持被出目利を可致被申候故見申候最前被遣候茶碗を見仕舞候へは何と見爲申哉と被申候故高麗かと見申候由申候得は高麗いらほ刷毛目の大茶碗にて候能き出來と申候へは別て見事成事にて候由被申又終て大茶碗を出し何と見爲申哉と被申候故又高麗に熊川と見及申候由申候へは井戸脇にて段々と拙者も持候ものと同しものの由被申候又三ツ足の茶碗を出し何と見申候哉と被申候故どこやら瀨戸なとゝ見及候由申候へは是は定て始て拜見申筈と被申田原の元祖古帖佐にて候網の手業抔別て名物にて候此茶碗は殊に殊勝に有

之能き好奇屋道具にて候由被申候其外靜隱殿にも見知不被申候由被申候又茶入を出し被申候て此は何と見申候哉と被申候故すんこ抔共可申儀見覺も無之由申候へはいや唐津にて候由被申夫よりよく〳〵見申候に笹の葉を黑く書き下は成程唐津と見申候へ共唐津の茶入は初て見申候故右の通申候又茶入を出し何と見申候哉と被申候故是は瀨戸と見申候由申候へは瀨戸は何出來かと被申候故橋姫手と見申候由及申候へは扨々よき目利にて候橋姫手の瀨戸にて候由又茶入を出し何と見被申候哉と相尋被申候故唐物と見申候由申候へは成程正の唐物常陸帶にて候由被申候扨々目利あかり候由被申候夫より申候は是程の茶碗茶入結構成ものはいつ方より參候哉と申候へは是は先々大藏殿御所持にて候當大藏殿あまり御存知も無之箱の銘書等も相知不申候故靜隱殿え見せ被遣候由夫故當分參合申候間見せ候由咄にて

候事都て右の茶碗茶入は昔より能存申たる事にて久々に見申候由存知不申ものは其己後江戸抔にていか様御求申たる事にて候はんと存申候由

是より田中新八殿筆にて候

一床の掛物を見申候に隱元の筆にて初祖達摩大師と有之候其掛物を見候様子をみられきのふか達摩忌日にて候由被申候右終て木庵は念願にて此達摩大師と申句を千枚ほと書され候由

一此間御下屋敷於御前書申候繪四郎左衞門を以差上候處山澤十太夫とのより四郎左衞門まて申越され候は右繪の内三幅對別て御氣に入此節表具被仰付候由承冥加奉存候由被申候左候て總州様ある時御意にて候は靜隱は目出度ものと御意にて候由子細は永銘を書候て差上候繪は壹枚にて皆々銘も印し不申候隅州様御代にも段々と繪仰付候へ共年付にて永銘を書候事は此節迄にて候事

一黄蘗寺建候て隱元より木庵卽非え咄にて候は此節寺もたち候付觀音入佛にて候へ共開眼未無之候間右兩人に賴の由隱元より被申候時諸出家の衆存候は開眼は壹人にていたす物に候處兩人にて開眼の事はいか様成次第かと諸出家の衆目も落さす見居られ候に卽非は新敷筆をもち新したに墨を染佛に向ひ二筆さし申され候て直に堂を被出候節木庵は抹香を焚手を合せおなしく跡より出被申候其時は隱元居合不被申候故諸出家の衆え開眼の次第いか様成事有之候哉と被申候に右の趣申候得はそれか壹人前のことにて候よし胸の開けたる衆の集りは面白きものにて候由扨又開眼と申事はかの宗にては點眼と申候て筆を持ちてさす事迄にて候但し其時の仕形眼に有

一或時木庵禪堂え入て座禪の時卽非長き鐘杖をつき參られ候時上に瑠璃燈かゝり有之候故木庵より卽非と被申候へは默したる返辭を致さ

れ候故鐘杖の上には瑠理燈か有故障るましきと被申候時卽非早速の一句に捧頭に眼有と被申候時木庵より眼有は却てなきか如しと被申候由木庵中々左樣成ことに默したる人にて無之由

一上總の丈山と申たる出家はいか樣成人にて候哉と相尋候へは別て活僧にて候由ある時外方へ出られ候時大百姓の知り人に行逢わかれ候時大百姓より申候は久々御寺へも不參候付今日は此酒を可差上由にて參候へ共いつかたへ御出の樣子に見及ひ申たると申候へは丈山より脇方へ暫參候故追付可罷歸候間其大樽は小僧抔に渡し能かんを致置と被申置頓て罷歸られ右大百姓の酒宴にて候由か樣成仁にてすこしも骨に殘す事なく其儘の人にて候由又大道と申たる出家も此丈山も佐土原の古月には隨身の人のよし遍參僧より承候由大道と申は別てかたき人にて御國僧抔も段々付添申たる事も有之由少の過ち有之

時は左樣成ものにては無之由別てしかり被申候由

一薄茶の致樣御存知の由ある出家より承及候いか樣成こしらへ樣にて御座候哉と申候へは茶を取候事は大方常の湯取にて候木たづの葉をとりこれを茶に三部一加へ候へは薄茶になるものに候其だつと申もの は何の味もなきものにて毒にもならぬものにて候由左樣成もの故野いげの白き花の咲のをとり花もくきも葉も共に燒此あくを以てたづを煮て甘みを付るもの也煮てなま干の時茶の葉の如くこしらへ交る也入來の壽昌寺の出家日外咄に參り右寺の茶か別てあしく有之候由申候に付薄茶の取樣を存候故おしへ申へき由申候へは幸の由申に付右の趣敎遣候處に其以後右の通相拵置所の役人抔參候節右薄茶を出し申候へは是はいか樣下り茶にても御座候哉扨々結構成由申に付手取の段申聞候へは各おとろき申候由畢竟御傳授を以能茶を拵候儀

御蔭にて候と申遣右手取の茶も送り候故たべ申に少も下りに替り不申と咄にて候事

但福昌寺殿にも右茶のこしらへやうは能御存知にて其外の出家も皆は大方此取様も存候て拵候由漸々とは鹿兒島も薄茶は出來申候半と被申候故濃茶の取様は御存知にては無之哉と相尋候得共是はかつて出來申ものにて無之由

一惟新様御意の由にて古き書物の内より見申候由咄にて候は人の茶立る時客より今日は人數も多く候間御茶を澤山になされ下さるへき由必客の申事も有之ものに候これは曾て申さぬ事に候子細は客を呼はぬとて茶を挽候て其茶を試に一服たて此茶なれは加減は此くらひにて能と究置左様にしてたつるものに候へは最早一服は其ぶんにて少し候か様に昔の人は氣を付申たる事故かつて無考なる挨拶等は無之

ものに候由

一淵邊春庵との所持の盆石持參り候處に此石は貰ひ候かと被申候故たゞ御覽被成これに相添候繪をあらをたのみにて候ゆへ持參候由申候へは昔見申候て能と爲存者と唯今見申候ておかしきものも御座候此石は高然暉と名を御付なされたるにては無之哉と申候へは成程養伯と寄合高然暉と付置候由もらひ申候わはれ咄致べく候昔し見申候時は別て能見及候へ共只今見申候へはさまでも無之石にて候此すわりは春庵か親毎日石に當尖り候處をすり切如斯にて候由

一昔心易く咄抔申候人只今は壹人も無之殊に若き衆抔故き事を承度存る人も靜隱にはあまり不承事に候何角に付むかしのことのみ案し出し候に西行の歌とて覺居申候歌に

舟岡の麓に墓の數そひて君をむかしの人になしける

此君とは侍輩の事に申候由たとへは自身昔の友達も南林山に參り此心に候

一郷原聾翁殿事は誰に茶湯は御習被成たる事にて候哉と相尋候へは御親父助之亟殿より御習被成たるにても候哉若年の御時助之亟殿は御死去故郷作左衞門殿抔に御習ひ被成たる儀も候はんと存申候事

是より木工様御筆

一此日も吸物抔被下候以後茶をも可進候得共一拂も無之由被申候て酒を寄合被下候に杓に嘉右衞門殿子息達間には下人抔も出申候酒のかんのひへ候時自分釜の蓋を取瓶に一柄抄湯をかけ直に釜につけかんを被致候別て殊勝に相み得候

六月五日晩

一此間は久々不懸御目候由申達候處暑中無異に相勤候由珍重存候由被申候隨て此七八日痛差起腹を下し老人故別て草臥候夫に付靜隱殿事兼ての所作と朝めし相濟かんきんをいたし右終て酒のかんをあつく

いたし小盃にて二ッはかりたべ醉あかり候節薄茶を二はい計被下候歟兼ての行狀にて候此節腹を下し申候節右の儀を取止め仕候處終に下しとまり不申候故兼て酒は少々好み候て被下候故一節止め候故却て如斯惡敷事も候はんと存今朝より酒を始薄茶迄も被候處に夫より下し相止申候夫より苗田元的え申遣脉を賴候處疝積にて候由被申候故別て見込好と存藥を被下扨又右の通兼ての仕付の趣を咄右通と委曲申聞候へは左樣成も有之ものゝ由被申候久敷仕付の儀はくはせに被成もの候故如此能く罷成申候事又候夫より拙者申候兼てそは切を好み被下候に腹合惡敷候節もそばをたへ候と能罷成候由申候へは夫より疝氣を持病にて候はん故其通と被申候事

一靜隱老宅客居之方に壁有之候に掛物懸り有之候其詩に

微風吹幽松其聲謖々寒六月坐其下穿衣不敢草有客忽而到汗流揮不

乾對面成炎凉令我生慨嘆

靈隱頑撥志老僧　靈隱ハリンイント唱申候由咄に候

右の詩を得と見居り申候に被申候は右は唐僧の西湖の人にて最早當分は遷化にて候半と存申候名高人と承候對面成炎凉と申句は中々難申見立と存申候子細は客と對々仕罷在候に客は別てあつく亭主は凉と申見立にて此事を客と我とに相考候に凉しく此松の下に居るまし と申句法と見及申候由咄にて候其上右掛物得と吟し申候折靜隱殿より被申候は起句の微風吹幽松と申句は寒山の詩の内に有之候を其儘被相用候と相見得候直に寒山の詩集を可見由にて見申候

欲得安身處寒山可長保微風吹幽松近聽聲愈好下有斑白人喃々讀黃老十年歸不得志布來時道

右の通に御座候詩の意も大形似寄候事にて此詩を本にして被致候由

被申候此寒山詩集の注は交易抔勝て博識の人にて候其交易は水戸え被居光國卿別て御秘藏に思召諸事御尋被成候事共候て天下に名高き交易にて候扨又其注の内に小長き所を見申候樣に被申候長き注を見申候に一二に此事は何と申書物に有之是は何々と注に相み得候其博學の儀此詩集を見申候て能き學問にて候由被申候事

戊寅正月二日

一年頭の爲祝儀見舞候處にあら玉り目出度候由互に申延天氣相の沙汰共いたし居候處下拙歳旦は致候哉と被申候故成程いたし置候由申候へは書付候樣に被申候故右の通書付入一覽候

試　毫

應知舊時事朝對新年花天外祥雲色日升照萬家と拙者名を書入一覽候處に日出度候由被申事

一或人の賴の由にて御吉書を二枚御書可給由書付候て入披見候一枚は

拙者御貰可申由にて右の書付を被申則硯取寄一圓相を書八十歳筆と
おくり被申候二枚共に即事に出來候故一禮を申達候今日は内證え隈
元次兵衛殿被參居此人も筆の序とて一枚書貰被申候殊の外晩に相成
候故いそかしく今日は被歸候事

三月二日夜
一今晩靜隱殿宅え參候處久々に逢候由被申候て拙者より申候は此間類
疔出來引入罷在候由申候へは先日伊集院彌平左衛門被參候て右の趣
承候故彌平左衛門え輕事にて候哉と相尋候へは成程輕樣子と被申候
間靜隱爲被申由は此疔には能きめい灸御座候是を覺へ居被申候樣に
彌平左衛門殿え咄の由候夫に付拙者え委曲被申聞候は能々覺へ居候
樣にと咄にて候其子細は兩方の手を親指と親指とキシト押合候て高
太郎指の屈く所へくぼり候筋のみぞ有之其所へ一ふし折候其頭え灸
をすへ候疔の出來やう左により候へは左の手計に灸いたし候右によ

り候へは右の手計にすへ申候眞中に出來候へは双方共にすへ申候由
是かめい灸と承居靜隱殿にも兩三人此灸を以燒直し候由咄にて候事
一當正月は御子樣御かくれ被成候由承及候所共可申樣も無之由被申い
くつに御成被成たると被申候故三ッにて候由申候へは定て利口に御
座被成候はん哉と被申候故兎哉角の返答にて被在候今日も申候と咄
にて候先の木村四郎左衛門か忘れかたみの娘子去年相果其折より來
年の雛飾とて色々用意致置候ものも皆水に成今日共は家内涙にて被
居候由承候故此酒抔のみ醉候て書寢にてもいたし候樣にと申遣酒抔
もたせ申候被(と脫カ)申候て落涙被致候何共可申樣無之事とて至極いたわり
被申候事
一ふくさ物六幅
右者夫々に歌を書記其心を御書可給由にて地紙相渡候へは成程相調

可吳由被申候左候て右の歌を一首被見候哉已後得と見申候て可書調由にて棚へ被直置候左候て咄にて候は此間石見様よりふくさ物任御賴三幅書調差上候由其節の御使に參候人親は靜隱殿にも能被存候者にて候由其子御使に參候故其者え咄にて被相尋候は石見様には御茶抔も御立被成候哉と申候へは成程間には左様成事も御座候由申候歟定て左様成御事にて候哉と拙者へ相尋被申候故しかと存不申候へ共夫は使の者不案内にて右通は不申候哉茶事は不承候由申候へは默り居被申候左候て靜隱殿被申候は石見様御方え有之候雪の山水の唐繪に獨釣寒江雪と讃有之候掛物は見候哉と被申候故いまだ左様成は見不申候由申候へは雪なとの時分勝たる掛物と被申候此書手も能く候由此名失念扨又其外にあまりふとく無之掛物に是又唐繪の此名も失念松とやら有之歟是も勝たるものに候由被申候事殊には從御先代茶器には

珍敷ものも段々有之候由

一從拙者申候は此間御書院え御座候牧溪の蟹を見申候に蟹の足は三ツに曲り書有之ものに候に二ふしに書有之候はいか様事にて候哉と申候へは夫は三ツに折れ候意を以書申候て宜候申あれは誠の正筆慥成もの候由咄にて候右の繪は當中馬源兵衛殿祖に中馬イジョンと申醫者有之摺の濱の湯治え差越居候折濱人の宿亭主古き箱段々と掛物類致所持候に夫を望み見被申候に右の鷺の繪に蟹有之ダチク類のもの相しらひ有之候故此繪を被見其方抔か此掛物持居候ても何ぞ詮も有之間敷候間此方え遣候ては有之間敷哉とイジョンより被申候へは相對にいか様にも可致申候故其節相求被申候由夫に古き表具相附居候由其亭主より咄に此表具は先年旅人參り此表具は相拂にては無之哉と申候故表具は取はなし其節相拂此繪計相殘り候由申候由左候て右

の繪をイジョン被相求寛陽院様え進上の由判迄も有之牧溪と相究重立候御寶物と被申候事

但御書院にて古き坊主共は右の繪の事をイジョン牧溪と唱申候事は靜隱殿にも能覺居被申候由

一先比參候せつ上村殿所持の光久公御歌にて候墨の御繪此間致借用科見仕候由申候へは扨々今に有之候哉と被申候左候て其節の御咄に炭の嫌道御座候由其事は何々にて候哉致失念候と申候へはシモクくらかけとて一し入か様〳〵有之事を嫌事と被申候返す〳〵も右の炭の御繪は于今有之珍敷もの候由その御筆に年號共はいか様に有之候哉と被申候へ共夫迄は慥に覺へ不申候由返答申候事

一橋口善内と申候者今日參候か是は小文才も有之詩抔もいたし旁心掛たるものに候此者今日も咄いたし候が大乘院坊中櫻本坊隱居當分參

被居候か其所持の由にて瑞圖の筆掛物を爲見申由是は字の出來も宜殊には文句も珍敷と咄嘸と爲申事の由咄にて候此連を被相求置候は先年三十年已前御當地え中戻被致候折琉球人持來候を被相求置候由右の善内承候とて今日も咄承候か見被成候と被申候へ共いまた見不申候由申候事但近日に可參存候事

一右善内は當分大目附座筆者にて罷出候由右の親瓢隱と申候は當分八十八にて候由左候て靜隱より善内殿え被申候は明日節句にても候間被見候ことく今日は月代いたし白毛をも髭をもすり候歟瓢隱にはいか様に被致候哉と被申候へは月代も不致髭もすらす罷在候由承候とて物笑にて候第一は頭殿のことく我儘にいたし候と被申候て猶又笑被申候事

一拙者より申候は此比は茶器に能き道具共は御覽不被成候哉と申候へ

は一切見不申候由にて然共波江野次右衛門嫡子に當分江戸え罷居候醫者坊主於江戸相求候由にて親次右衛門方え相下候由にて次右衛門より此方見せ（脱カ）申候古備前の茶入と見申候是は此比に珍敷口のほそき耳付の茶入にて候由咄にて候事

一去年暮に罷出茶相立候道具やはり當時迄召置候此間篠原庄太夫え申候はと靜隱殿被申候はいつそ此方え參候節近習の者まで取に遣候樣にと噂有之候由をも咄にて候左候て右の節持越候古備前の水指の文句を時々其已後見被申候に一躰はよめ不申候へ共石乳と有之是は至極の藥にて甘きものゝ由又者醍醐と有之是又甘き事の限なきものに候へは先は茶事を賞味いたし書候ものと讀置申候咄にて候左候て近日中に必取に可遣旨被申候事

一此間森傳左衛門江戸より書付遣候神尾左兵衛樣年頭の御茶會の内に

て遣候書附を見せべき由にて一覽いたし候に最初は會席前に古佐雜煮にて候此か御當地抔にてはやらざる事にて候由珍敷事に候此神尾左兵衛樣は御先祖神尾備前樣と申候て名高き御茶人有之候其子孫にて候故諸事の御見立能候由被申候

但右道具附折節篠原庄太夫に被參居候故寫可被吳旨申置候故此れ參候はゝ其道其附に不審の事共も有之相尋候趣を以夫に引札いたし可相記内存候事

一田上えドンリヤウ居被申候節靜隱殿にも伊集院善太夫殿列立被參候にドンリヤウ茶抔被出候とてあたらしき水抔にて茶家をかへ茶をせんし被遣候何かと有之候折節横座え至極年の寄たる和尚參り居被申候にあれは誰にて候哉と被申候へは吉田津友寺名失念の由と被申扨は各へは始て逢候とてすげもなく被申候故音には承及候歟扨は始と

挨拶抔有之候に右老僧より被申候は其外抔兩人はいまだ年若候か定て若衆抔見候ては能きと存知候哉間には若女抔見申候ても能きと存知候哉と被申候故成程目には左樣にかゝり候由被申候へは夫か尤にて候左樣に存ても一通にて候此れに能き歌有之候間咄可申由にて是又すげもなく被申候由

戀といふその水上を尋ればばりくすつほの二つなりけり

と被申候由實〳〵是は二つの間にてなと申候由咄にて候

但此歌を其後靜隱殿被聞候へは上み方にて男女戀に死たる者有之夜〳〵と姿をあらわし不思議成事共も有之ある大德の和尙えいんとふを相求候へはおかしき事に思ひ其時右の歌を被讀候由其歌にて候と咄被申候左候て右の歌右の男女姿をあらわし候事も無之うかひ候と承候由是又咄にて候

一右の吉田津友寺和尙は殊の外長命にて被居候に太玄院樣御逝去の御手を引あけ被申候福昌寺名失念和尙隱居被致深固院え隱居にて被居候に右吉田津友寺隱居の弟子にて津友寺被居候節右福昌寺の隱居老僧にて居被申候へ共津友寺より弟子と存知被存候故何にても少物の申違候へは左樣成惡敷事を申とて火吹を取揚たゝき被申候由老人も夫〳〵に年輩おとりはいつ迄も同し事の由右引ことにて笑被申候事

一右終て咄にて候は此西田奥附足輕とやらの祖母抔百餘歳に被成候もの有之候由右の祖母娘と申は是又七十餘の人の由其者えいまた年若き候故物每不功に候なとゝ百餘歳の祖母申候由是又笑被申候隨て咄にて候は百姓の內に女には必百餘歳迄存命のもの共間々有之候士已上には有少く證據にて候と被申候事

一此節御城橋え七日佛の屋形を居へ置候御詮儀に何者のいたし候儀も

不相知候哉と被申候故いまた何樣共不承候由申候へは前代未聞の事の由被申候隨て拙者申候は右七日佛はけからはしきものに存候故家來に兵道被在候間申付候は右通の事候へは先穢はしき道具と存候然は右式の儀を清め候法も御座候其方抔御城の事にとかふ申候も不成合には候へ共兵道の法も有之候はゝ其心得を以相清め候方可然由申付候へは一日一夜の看經いたし相清申候此儀我々或不入事に申付候段は不成合にては御座有間敷哉と申候へは夫は尤の事と被申候右終て咄被申候は太玄院樣御姫樣御病氣に被成御座候節寛陽院樣御祈禱被成可然由にてケ樣の事迄能々兵道の法も御存被遊候由眞言坊主名失念安養院か右の者え御祈禱被仰付荒佛の聖天の法を以御祈禱仕いまた七日にも不成內に御姫樣御かくれ被成候由然に右御祈禱申上候坊主一通聖天の法を以て祈禱いたし候て後目見得かね候樣子にて座

內をも步被申に脇より小坊主共御目見得かね候ては無之哉と申候にいや何共無之と申居られ由從其事を寛陽院樣被聞召上夫は荒佛の聖天の法を行候間聖天をはいか樣あらき樣にいたし置たる共にては有之間敷左候はゝ御姫樣御病氣も天命と被思召上事故右通聖天をあらき樣に致置たる共に候はゝ本の通にいたし置可然由を以御側通の內より上使にて被仰下候へは右安養院より上意の趣扨々難有奉存候左候はゝ聖天を本の通に可仕とて池の泥の中より引出し小僧共へ洗へと被申付候由然に其時坊主より被申候は此節御姫樣御祈禱に取付一七日にも不成內御隱被遊候故則聖天をは不屆に存右通り泥に埋め置御快被遊御座候はゝ出し可申內存にて候と被申候隨て目見得兼候も夫より又本の通快有之候由其事寛陽院樣被聞召上いか樣左樣に共いたし置候半と被思召上この聖天をあらくいたし候罰にて目見得候わ

んと御意有之候由誠に其時迄出家抔は左程計思ひ切たる事を仕候由
近年の諸出家亦は兵道抔先は無心許存候由物笑にて候（と脱カ）被申候事
一拙者より申候は昨夜咄共いたし居候折柄郭公を承候由申候へは是は
珍敷候夫は本尊かけたかと申候哉又はクワツ〳〵と申候哉と被相尋
候故クワツ〳〵と申候由候へは春もなき候事間には有之事の由西行
の歌の由にて咄に被致候其歌を覺へ可被歸と存篠原庄太夫被參居候
故書付貰度由庄太夫え申候へは靜隱殿自身可相調由にて書付被吳候
別紙に有

春ほとゝきすを聞て　西行法師

めつらしとおもひそあへぬ郭公春聞ことのならひなけれは

一此間硯を貰申候にチボと申歟是は何樣成硯石にて候哉と相尋候へは
始て被聞候由被申暫考居被申夫は土石にては有間敷哉いろはのつゝ

きを以うらなひ候へは土石共可申候然共チボと申候へは中にへの字
有之候故又土石共申かたくいつれは存せさる由咄にて候
一此年頭え參候節梅盛にて候故梅の詩を作今晩は持參いたし候由申候
へは見被申是は存候由被申左樣に拙者え讀み申候樣に被申候故一通
二首共に讀み申候へは賀右衞門殿そこへ居被申候故是を見よと被申
賀右衞門殿にも其時見被申候事

其詩は詩留置候一帳に新年訪三曉菴隱士と書付五言絶句二首
にて候事

一拙者より申候は先達て御指南承候養性の事に付あゞ足を踏付け候儀
を心掛候へは此比は右の樣に堅まり申候然に此間よそえ參りいつれ
も歷々の衆多有之各樣のあゞを見申候に殊の外和かに有之女の足な
との樣に御座候由申候へは拙者あゞをも見被申何樣にいたし候へは

か様に候哉なとゝ被申衆有之候其時拙者より又々申候は是は歩候事繁く候故夫故の事と御傳授の用意は曾て不申候由凡咄いたし候へは夫は別てよき心掛にて候夫を不斷くせに成候樣にいたしあど踏付け歩き候へは心も落付旁養性に可然事の由被申候事

一朝起あかり候に又々一つのよき傳授有之由にて咄承候は兩手を頭へあげ裏表と動かし七八邊もいたし候て又々兩手を頭へあげて裏表と動かし七八邊もいたし候て又々兩手を頭の上にてくみ體を十度計も兩方えよせ動かし候歟獨按摩の仕樣にて其跡にて息を十計つき出し起あかり候へはあまり起にくき事抔は無之ものゝ由然に夫に付一ト咄有之由にて承候は總州樣御當代諸浦々を御廻被成候御旗本長命の御方有之總州樣御代芝御屋敷え御見舞被仰候は私事先年御國え參長長罷居何かと御厄害に罷成候ものにて候然に罷出候儀は何そ外の事

にても無之多年養性方に心をよせ當分迄長命にて罷在候間養性の次第を御咄可申上候由にて其時被仰候は惣身の常に兩方へうこかし候程藥と申ものは無之候夫故息才に只今迄なからへ候と被仰候由唯此兩方へ常々身を動かす計よりも此獨按摩か第一ましにて候と被申候事

但夫程まて惣體を動し候事は藥のよし

一今晩も手前にて候此手前前以いろりへ炭をつき被申候に手抓のにて候殊の外殊勝に相見得候左候て湯も煮へ申候由申候間御茶一服被下度由申候へは直に手前にて候

茶碗此比取出し申候唐津にて候由久敷拵不申道具にて候由

なつめ茶上林三入名もなき由

茶杓拙者削候竹

右の通如例今一服被下にては無之哉と被申候故御仕舞可被成由申達相仕舞被申候左候て壽國寺太皷も聞へ候間先御暇可申由申候へは相賴み候六幅の繪は追々調可吳由被申候左候て罷歸候にゑん迄出被申候故いや庭へ御出の儀は罷成間敷由申候折牡丹今を咲にて候賀右衞門方え近日中に參可見由被申候て夫より暇乞いたし罷歸候事

三月十六日夜

一今晩は隙を得候故爲御咄罷出候由案内申通候へは看經所え被居直に椽まて出被申候故先其後は不懸御目段互に挨拶抔申候事

一靜隱殿被申候は先日石見樣被成御出候隨て此間咄いたし候條織部の出來物の御咄有之候故成程其通其御茶入は瀨戸織部燒の出來にて候故御秘藏被成可然由申上候抔と咄にて候隨て又靜隱殿咄に御宅に御座候梅老人の梅の繪又は書手は覺不申雪の山水の繪に獨釣寒江雪の讃有之掛物は當分もやはり御座候哉と御尋申候由成程當分も有之由

御咄被申隨て石見樣より被仰候は右次第の掛物類又は茶碗類多々有之候故山路喜平太を御呼被成御見せ被置候はん由御咄にて候故申上候は喜平太事も餘程目利なとも御座候故左樣に被召置可然由を申上候と靜隱殿咄にて候左候て石見樣御事は始て御目にかゝり上候先年慈德院樣御發足の砌御供にて千石馬場を御馬にて御供被成候節よそなから見上候由被申候事

一右の何かとの御咄より靜隱殿被申候は石見樣御所持の梅道仁の繪は外に鹿兒島え有之者にて有之間敷候隨分御秘藏可被成由隨て此梅道仁と申人は梅花道人共申由元の代の人にて賢德有之勝たる人と承候左候て墨繪を好きにて書たる人と承及候左樣成隱者故不珍事無限ものと御咄是又御咄申候由被申候事

一靜隱殿又々咄にて候は梅花道人と爲申人は隱者故殊の外家貧にし

て茅簷などの様にいたし居被申夫婦一所に居被申たる人と承候今日の食事も調かね候様に有之内儀は別て世話被致事候に右の梅道仁は夫にもとんちやく無之好き之墨繪をやはり書居被申候或時内儀より被申候はか様に家も貧にして今日の渡世難成候に繪を御書被成候は浮世の人の好み候様に彩色などの繪にて候はゝ人もほしく可存に此墨繪迄にては迚も人も好間敷と被申候時梅道仁の詩に

雪裡孤松雨後山　見時寔易畫時難
早知不入時人眼　多買燕脂畫牡丹

先右の詩を相考候様に被申候故承居直に書記申候夫より一句つゝに申分られ候は雪の中の一つ松又は雨の晴るゝ時分もやのかゝりたる山の景是程の能もの有之間敷候左様成を一目には誰も見安き事なれ共畫として中〳〵不及と申二句にて候扨又此轉句誠に面白く候早々

時の世の人の眼に入つて好候事を存たらは多くしやうゐんしを買て赤牡丹を見事に書んと被致候は眼の付所違たる人にて中〳〵牡丹はかゝぬ見込と相み得候由先此詩の面白き事を能々考て見候様に再三被申候事

一右咄終て又々咄にて候は此轉句の早知不入時人眼と申より結句迄は大乘院不石も時々咄居被申扨此詩の句を相考被申候に餘程面白き體と被存候由此くちの方を見度と度々被申候故靜隱殿並四元庄藏なと寄合何の書に相み得候哉なとゝ折角手を盡吟味致候へ共不相知事候處或時樺山主計殿御宅え夜中に參候折古き唐筆の卷物の切れ〳〵に相成居候を御見せ被成候に不圖右の詩の全篇相見得候見當是はと兩人共に爲申事候に存様成詩なれは右様に申候哉と被仰候故此詩は不石上人兼々爲被申居趣向々面白詩にて右の次第を委曲御咄申候へは

扨は右樣成事かと被仰樣由右の詩を其儘寫持歸候由然に罷歸千香を立床に置不石上人え草の陰より是を御見やれと申て手向候と咄にて候事

白鷺洲第貳終

大正九年八月廿五日印刷
大正九年八月廿七日發行

編輯者　林縫之助
東京市京橋區鈴木町十二番地

發行兼印刷者　風俗繪卷圖畫刊行會
代表者　林縫之助

發行所　吉川弘文館營業部
東京市京橋區鈴木町
電話京橋六九七
振替東京二四四

吉川弘文館出版部
東京市京橋區新榮町五丁目
電話京橋二九九

198
Z
415

詩會

東京帝國大學圖書之印